

考察「絵画製作」 5

——しなやかな造形活動を求めて——

佐 藤 五 十 五

＜目 次＞

- はじめに——乳幼児における造形活動分析——……清泉保育女子専門学校・清泉論集 第13号 p53
- 1 つかむ(掴む)・つかまえる(捕まえる・捉まえる)……清泉女学院短期大学・研究紀要 第2号 p55
 - 2 にぎる(握る)……同上 p57
 - 3 つまむ(摘む・撮む・抓む)……同上 p59
 - 4 やぶく(破く)……同上 p60
 - 5 まげる(曲げる)……同上 p61
 - 6 まるめる(丸める・円める)……同上 p62
 - 7 ころがす・ころがる(転がる)……同上 p63
 - 8 ならべる(並べる)……同上 p64
 - 9 ぬる(塗る)……同上 p65
 - 10 うめる・うずめる(埋める)……同上 p66
 - 11 すくう(掬う)……同上 p68
 - 12 つなぐ(繋ぐ)……同上 p68
 - 13 はじく(弾く)……清泉女学院短期大学・研究紀要第3号 p55
 - 14 たたく(叩く)・うつ(打つ)……同上 p57
 - 15 ひっぱる(引っ張る)……同上 p59
 - 16 ほる(掘る)……同上 p60
 - 17 はる(貼る・張る)……同上 p62
 - 18 おる(折る)……清泉女学院短期大学・研究紀要第4号 p109
 - 19 する・こする(刷る・擦る)……同上 p111
 - 20 まく(巻く)……同上 p113
 - 21 きる(切る)……同上 p115
 - 22 むすぶ(結ぶ)……同上 p117
 - 23 ふく(吹く・噴く)……清泉女学院短期大学・研究紀要第5号(本誌) p85
 - 24 のばす(伸ばす・延ばす)……同上 p87
 - 25 とおす(通す・透す)……同上 p89
 - 26 つつむ(包む)……同上 p91
 - 27 さす(刺す・射す・差す・挿す・指す・注す)……同上 p93

23 ふく(吹く・噴く)

口をふくらませて、細目にあいた口先から息を吹き出すというこの動作は、今まで考察してきた色々な動作と少し趣が異なる。それは今まで取り上げたどの動作も手にまつわる動作として考察し、幼児の身体機能の発達とのからみの上からその意味付けをしてきたからである。その点「吹く」という動作は始めから「手」と関わりが無い動作として考察対象としなくてはならないわけで、考察によっては「絵画製作」の領域あるいはその性格付けに一役果

すことができるかも知れない。勿論「吹く」には「吹聴」という意味もあり、意気込みだけではまさに吹いたに終わってしまう結果も待っているわけで慎重を期さねばなるまい。

- 笛を吹く
- 空びんの口を吹く
- 草の葉をくわえて吹く
- 薄紙に口を当てて吹く

「吹く」という動作は生理的な機能としての呼気・吸気と密接な関係があり、呼気の時にちょっと口をつぼめるだけで「吹く」という機能は成り立つわけである。乳幼児の発達段階上において、つかまり立ちの出来る頃あるいは身近かな物を手に持って「おしゃぶり」が盛んになる頃、自然発生的な動作として身についていくものと思われる。しかし、「吹く」ことによって生ずる効果（結果）を考えれば多分に周囲の者の助言によって、その場面を獲得していく動作であり、「吹く」ことによって生ずる結果との因果関係の認知をもとに吹き方の強さ、長さあるいは吸気との関係へと学習的な要素も生じてこよう。

「吹く」という言葉から一般的に思い浮かべる活動は「笛を吹く」という音楽の分野の活動で、絵の具を吹いて飛ばすなどという活動はおよそ一般的でない。しかし「吹いて」音を出すこと、物によって音色が違ふこと、音はブルブルとふるえる振動であること等を肌に触れて知ることは色々な物理解や感覚感受であり、表現活動の下地であることを考えれば、あなたが絵画製作の領域として見当はずれということもないであろう。口にくわえ込んで息をすだけで音の出る笛から、楽器としての技術を要する笛まで種々であるが、色々なものを吹いて音を出してみる。空びんの口を吹いて低い響きのある音が出せた時、葉っぱを口に当ててビリビリするふるえと同時に音が出た時、薄紙を唇に軽く触れるようにして声を出しながら吹いた時の唇に感ずる音の振動。こうして得る音は音楽的というより物理解としての意味が大きいであろう。「すゝめのでっぼう」や「葦」の葉の芯を抜いて笛にしたり、「からすのえんどう」の黒熟前の実を割って中の種を出して莢の端を切って笛にするのは、吹き方のコツばかりでなくて葉の折り方や切り方の工夫を知らなくてはなるまい。しかも一年中いつでもというわけにはいかない。その草花のある時期に限られている。しかし、昨年鳴らなかった草笛が今年は鳴らすことができ、来年もこの時期にまたこの草笛を吹こうというのは、ややノスタルジックな考察であろうか。

- シャボン玉をふくらます
- 風船をふくらます
- ろうそくの火を消す
- 絵の具を吹きとばす
- 風車を吹いてまわす

「吹く」ことによって生ずる音は耳を通じて感覚され、吹き方の工夫は耳を澄ますことに

よってしかその結果が得られない。でもシャボン玉は、小さきみに七変化する色と次第に大きくなっていく形の変化を目のあたりにしてくれる。口にくわえたストローの吹き方次第で大きなシャボン玉になったり、飛ばずに消えてしまったりする。しかしそれもほんのちょっとした吹き方の違いでしかない。そうしたわずかな違いを調節できる機能がこうしたシャボン玉遊びの中に隠されているといえよう。それに比べてゴム風船をふくらますのは、ポンプ代りになって思い切り息を吸い込んで細い口先から力一杯吐き出さなくてはならない。はち切れんばかりに空気の一杯つまった風船は実に軽々と宙に舞う。指先がちょっと触れただけでも1mもはね上る。つかまえようにもなかなかつかまらない。一方ゴム風船と違って紙風船をふくらませるのには吹く勢いが必要である。空気をつめてふくらませるのではなくて、吹いて風を送ってふくらませるのである。だから紙風船はそうとつかまえないとつぶれてしまう。その度に吹いて型を整えてやる必要がある。今はこの紙風船をあまり目にしなくなってしまったがやはりこれは一度ふくらませて、そうと置いて見て楽しむという性質のものなのだろう。動的な遊びに使うにはあまりにも間延びをした要素が多い。ゴム風船はその点動的な遊びにも充分対応でき、吹いてふくらませるということのみを取りあげても楽しい活動になるであろう。一杯にふくらんだ風船の口を離してやるとすさまじい勢いで空気を噴出して、風船そのものも勢いよく予期せぬ方向へ飛び去る。風船の口に工夫して口先をつけてやるとふくらませる時に都合がよいし、離して飛ばす時にもおもりになったり、奇妙な音が出たりしてそれなりの効果があろう。お祭の夜店で売っている羽のついた風船で「ベェー」と音が出るのは口先にこうした細工の笛がついているのである。

昔は火吹竹という道具が台所にあって、炊事をする時に欠かすことのできないものであった。吹いて火を起こすというあまりにも原始的な方法は、今ではキャンプにでもいかない限り体験することはないであろう。吹いて火勢を強くするのは「ふいご」である。吹くことは風を送ることで酸素を補給することで燃焼効率を上げようというものであるが、反対に火を消してしまうこともある。誕生日のケーキにともったろうそくの火はたいがい「吹いて」消すことになっている。

吹くことは不思議な新しい世界との出会いである。見えない物の力によってふくらんだり、廻ったり、音が出たり、火が消えたり、反対に火が大きくなったりする。しかしその不思議さはあたりまえのこととして、日常的な動作の中に溶け込んでしまっているのはどうしてだろうか。不思議さを不思議さとして大きくふくらませてやるのが幼児教育の場であろう。それには文字通り大きな大きなシャボン玉を作ったり、口で吹かないで静かな風で鳴る大きなびんの笛を作ったりと可能性への挑戦は残されたままであるといえる。

24 のばす（伸ばす・延ばす）

「のばす」という動作は、引張ってのばしたり、押してのばしたり、叩いてのばしたりと手先や手の平を主に使い、力の入れ方によっては腕や肘等の上半身の機能にまで及ぶ動作である。また本来この動作は粘土やゴム等のもともとのびる特質があるものを対象にしての動

作であるといえよう。しかし長いものや平らなもの、まっすぐなものも延ばしてそうした状態になったと捉えることによって、それ自身には伸縮の特性はなくともたたんだり、丸めたり、曲げたりしておくことで延ばす動作と関わりを持たせることができるであろう。また「のばす」という動作を他の動作と複合させて「つないでのばす」「並べてのばす」「貼ってのばす」「結んでのばす」等とすれば、伸びて広くなったり、長くなったり高くなったりする変化を色々なものに求めることができ、動作対象になるものは一段とその幅を拡げることになろう。

- 粘土をのばす
- ひもをのばす
- 丸めた紙のシワをのばす
- ゴムひもをのばす
- 紙テープをのばす

粘土は楽しい材料である。押せばへこむし引張れば伸びたり、ちぎれたりする。なによりもそのやわらかな感触が幼児には親密感がある。ちぎって両手の中でコロコロ転がせば小さなお団子になったり、細長いへびになったりする。ゾウさんを作ったり、キリンさんを作ったり、その度に粘土は粘土板の上で、あるいは手の平の上でトントン平らに伸ばされたり、コロコロ長く伸ばされたりする。粘土での活動は必然的に「のばす」動作を含んでいるといえる。しかし、こうした粘土の活動は多分に粘土細工的な手先のみで、小ぢんまりと終ってしまう活動になり勝である。豊かな創造性に豊かな活動としては、もうひとつ盛り上りに欠けるきらいがある。それには粘土に取りかかる始めに、既に形の決った何々を作るという固定的な考え方を変えて、粘土の特性と親しむというねらいでこうした「のばす」活動を展開してみたらどうであろうか。形を作るよりもまず「この粘土の塊、どこまで伸びるかな」ということで長さくらべ、高さくらべ、広さくらべをしてみる。そうして長くなったものをつないでもっともっと長くしてみる。日常的な生活場面では目にすることのできない長い長い粘土、広い広い粘土を前にして子供達の受け取り方はどうであろうか。固定的な発想とは違った新しい発想や展開がきっと生れるであろう。そしてそこから、ひとりひとりの子供の豊かな創造力の実現される場になるであろう。また、たとえ新しい展開が得られなくとも、今まで想像することもなかった場面を眼前にしての幼児の受ける感覚的な拡がりには充分意味を有するであろう。

他に伸びるという特性を持ったものとしてはゴムがある。最も日常的な輪ゴムによってゴムの特性は容易に知ることができる。しかし粘土とは違ってゴムは引張って伸ばせば、その分引張り返す力をゴムに蓄えたことになる。「のばす」力と「ちぢむ」力を考慮に入れた活動にしなくてはならないであろう。(前出 15 ひっぱる の項参照)

「のばす」動作として最も典型的なものは、ひもやテープやコードやホース等の線状の長いものをどんどん引き出していく動作であろう。紙テープやビニールテープあるいは紙ひも等

の長いものは色々な用途のための材料であり、しっかりと巻かれて適当な大きさになっている。そして用が生じた時に必要な分だけ引き出されて使われるわけである。しかしこの用のためだけでは、延ばす動作としてはあまり意味を持たない。こうした用を離れてテープを考える時、初めて延びていく素材として浮かび上ってくる。「このテープどこまでのびるかな」という一言は少しばかり風のある園庭で、とてつもない世界を現出させるであろう。こちらの立木から遊具を巡って向うの立木まで何回も何回も往復するテープ。こちらのフェンスから向うのフェンスまで色々なテープが波打っている。テープの川の流れに沿って走り出す子供、テープの波の中で泳ぐ子供、遠くから風にはためく色とりどりのテープを眺めている子供、テープはただ延ばすことだけが目的で、延ばして川を作る、波を作るという意図が働かない方がよいであろう。幼児にとっては長く長く延びたテープを受け止めるだけで感覚的な拡がりを得たことになる。勿論、何回と繰り返すうちに発想が定着してテープで川作り、波作りをしようという活動が生れれば意図的に延ばす活動となってもよいであろう。そこにはまた新しい展開を伴っての創造的な活動が生れる筈である。ただ始めからテープの川作りに取り組ませたくない理由は意図した分だけ幼児の世界を小さくするからである。つまりテープの流れは川ではなくて虹になっても、道路になってもよいし、線路と見立てても、陣地の境界線としても、電気の通る線としてもよいわけで子供達の発想がそこから見い出せることが大切だといえよう。延びて長くなり拡がるということは、幼児の感覚にとっては気分を解放し抑圧感を取り去って発想の幅を得ることになる。またある意味では視野を拡げて新しい世界を感受させる効果もあろう。そうした点からいえば単に長いテープ状の物ばかりでなく、一人一人の一点一点を並べて延ばす、貼って延ばす、積んで高く延ばす等々延ばす意味を拡大解釈することも可能であろう。こうして長く伸び、拡く伸び、高く伸びた物に対しての幼児の受け止め方は必らずや新しい発想を生むであろう。その発想を大切に取り上げることによってまた新たな造形活動が展開されるであろう。

25 とおす（通す・透す）

「とおす」という活動は特定の動作を伴っているわけではなく対象とする物によって様々な「とおす」ための動作が生れる。指先でちょっとつつただけで通る容易なものから金槌で力一杯叩いて通すものまで、それぞれ違った身体機能の動作として物と関わらなくてはならない。指先・手先から全身の身のこなしとして関わらなければならないものまで色々である。「とおす」ということは物の表から裏へ、前から後ろへ、上から下へ、右から左へと突き抜けることで、物の本体・中味をつき破る手だてとしてこの「とおす」という動作が生れる。そうした意味からいえば、これは穴をあけるという動作と同じである。また、すでにあいている穴を抜けて反対側に出すことも「とおす」という動作で表わされる。抜けて反対側に出るのは物ばかりでない。光や音や風も通すことができる。光は穴があいていなくても反対側に「とおす」ことができる。それはまた視線を通すことと同じでレンズを通して覗くことの出来る世界は、現実の世界でありながら見えないものが見えたり、おぼけのように大き

く見えたり不思議な世界を展開してくれる。

- 発泡スチロールに楊枝をとおす
- 障子に指をとおす
- ビーズに糸をとおす
- 落葉に棒をとおす
- ダンボール箱に釘をとおす

「とおす」という動作は「さす」動作と重複する面が多分にある。「とおす」ためにはまず刺さなくてはならないし、刺す力でそのままとおすこともできるものもある。しかし刺した力とは別の力を加えなくては通らないものもある。刺す動作と重複する「とおす」動作は当然のことながら形態的には長くて先端のものがったものの扱いとしての動作といえよう。発泡スチロールに爪楊枝を「とおす」のは刺す動作とはほとんど変わらない。ここで「さす」と「とおす」をあえて区別するとすれば、刺した面の反対側に楊枝の先端がのぞいた状態をとおったということができよう。それは刺す力の違いというより発泡スチロールの厚さの違いでしかあるまい。色々な形に切られた発泡スチロールに楊枝を通す。それも楊枝の頭をしっかりと発泡スチロールの中に押し込んでしまう。そうすると発泡スチロールのブロックはそれぞれ鋸の形態になる。しかも鋸の頭が発泡スチロールなので鋸と鋸をつなぐことができる。こうすると楊枝付きのブロックをつなぐことで長い長い電車ができたりトラックができたり、高いビルや塔になったりする。更にはブロックの山の中から形さがしが始まって、いくつかをつないでゾウさんを見ついたり、ワニを見ついたり、様々な見たてや発想が生れるであろう。こうした活動を生むためには発泡スチロールのブロックを矩形ばかりでなく、丸みを持った形も準備しておく必要があろう。画用紙やダンボールをはじめ紙類などは「さす」ことは即「とおす」ことになってしまう。障子に指を「とおす」のはつかまり立ちの乳児にとって楽しい日課のひとつである。指の通った穴を通して隣の部屋を覗くことができる。そういえば覗き見る場合はたいがい中間に視線を遮断するものがあって、そのすき間や穴などを通して見ることで「とおす」という言葉と無縁ではない。光や風を通すということも外界と遮断しているものに穴やすき間をあけることで、通すことによって、外と内が一体になることを意図しているといえよう。見通すという言葉は次元（時間）の異った場面をつなげて一体にする意味で、障子に指を通してその穴から隣の部屋（世界）を覗くのと同じことであろう。

紙に釘を「とおす」のには机の上に置いてというわけにはいかない。紙の裏側に邪魔物があっては不都合である。障子のように^{せん}棧や^{せん}枠にピーンと貼ってあれば、プツンと通す快感はなんともいえないであろう。こうしてプツリプツリと思うままに釘を通した跡は、点々の穴の集まりである。太い釘で通した穴、細い釘で通した穴。点々とつながり集まる穴は色画紙の上に置くと赤い点の集まりになったり、青い点の集まりになったりする。穴の裏に小さな色紙をあっちこっちに貼ると、まちまちの色の点の集まりに変化する。紙に釘を「とおす」穴あけも色々な発想をもとに表現の工夫ができるといえよう。ダンボールに模造紙などの薄い紙

を貼って、しっかり立てておいて、釘を「とおす」などしたらうまくいくであろう。またこれは、「とおす」動作ばかりでなく反対側においてブスリと釘の先端が紙を通して抜けて出るのを見るのも楽しいことである。そのうち交互に両側から穴をあけて点々をつないでいく。点々は円になって閉じたり、グルグル廻って外に出てしまったり、人の顔になったり、紙のこちらと反対側で通ってきた釘の先端を見て交互にその先へ釘を通していくことで楽しく繰り返す活動になろう。相手と意志を通じてやってもなかなか方向が見つからず面白い展開になるであろう。「とおす」ことが穴をあける動作としての興味に引かれて繰り返されることは、今考察した通りであるが、野外に於いては砂場でトンネルをほり、水を通すなどで度々観察することのできる活動でもある。(前出 16 ほる の項参照)

「とおす」動作としてもう一つ考察しなくてはならないのは既にあいている穴にひもやテープ・棒などを「とおす」活動である。ビーズにひもを通すのは、こうした動作の典型的なもので、そのひもを結んで首飾にしたり、腕輪にして身体につけてみる。これは春遅く柿の花の散ったのを集めて芯の穴にひもを通して首飾を作ったり、秋の落葉にひもを通して冠を作ったり等、野外で自然の草花や実との関わりを持つ場面で必要になってくる動作でもある。

通して穴をあける楽しみがまたその穴に別のものを通す楽しみにならないものであろうか。穴あけの道具には千枚通しというまさに「とおす」という名のついたものもある。これは紙専用のものであるが、他にもパンチという切って穴をあける道具もある。千羽鶴用の小さな折り紙にパンチで二ヶ所穴をあける。この二ヶ所の穴にひもを通す。あるいは針金を通す。1mぐらいの長さに30枚ぐらい通して少し高い所から下げる。色紙を整理して通す順を工夫したりして同じ所に一列にいくつも集めるとのれんのようにも見えるし、円く集めるとシャンデリアのようだ。二つの穴を通ったひもに絞られて小さな折り紙はそれぞれ軽くカーブする。色によっては何やら動物のしっぽのようにも見える。針金に通した色紙はすべりがよくて上・下反対にするとスルスルと落ちてくる。針金が曲っていると遊園地のジェットコースターみたいだ。こうして集めることで幼児の発想が生れるのを待ちたい。ここで生れる発想いかんによって、対象児の年齢や発達段階に対応できたねらいや活動であったかが知れるし、創造活動として豊かに展開できるかも決まるといってよいであろう。

26 つつむ(包む)

「包む」という動作は特定の身体機能を必要とするものではなく、紙や布などの物の取り扱いのひとつとして考えられる動作である。「包む」ことは、ある物を別の物で覆って外に見えないようにすることで、物そのものを直接的な視線からそらすことにある。そうした必要性は相手に対する心遣いから生じたり、また自身の立場の都合上から生じたりする事柄である。ストレートに物や感情が伝わるのを遮る効果の故であろう。送り物をする際、決して物そのものを手渡さずに必らず何らかの包みをして送るのは、そうした意識が相手に対する礼儀にまでなっていることの表われであろう。また、自分の感情をおさえたり、相手の思惑を気づかうことで自分自身を包むことを「つつしむ」というのは、ほかならぬこの「つつむ」

が語源であろう。勿論、物を「包む」ことは散逸し易いものをまとめたり、くるんだり、貯蔵したりあるいは運搬の用をこなす生活上の知恵でもある。そうした意味では、今は紙袋やビニール袋におされて日常的ではなくなったが、風呂敷は風呂敷包みという言葉でも知れるように包むための道具であったわけである。

包みは意味的に礼儀の意識を生み、礼儀は必然的に形を生み出し、形は必然的に装飾性を生み出し伝承性を持った。熨斗袋はそうした包みの歴史の結晶である。人を包む衣類をはじめ現代社会においての包みはパッケージというジャンルまで作って、その機能美と装飾美を求め続けているといえよう。

- 紙でお菓子を包む
- サラン・ラップでおむすびを包む
- アルミホイルで芋を包む
- 風呂敷で箱を包む
- シートで遊具を包む

「包む」という動作は包むものと包まれるものとの関わりのなかで包むものの取り扱いとしての事柄であり、一般的には紙類、布類、ビニール類等々の平らな一枚物の取り扱いということになろうか。サラン・ラップやアルミホイルはもともと台所用品として包んだりくるんだりすることを用途として開発された商品で食品を「包む」という面では多様な利点を持っている。こうしたものが無い時代、紙がその全てで水分が出たり油分が多いものは全くお手上げの状態であったといえよう。しかも紙といっても専用の包み紙というわけにもいかず古新聞や広告紙といったもので、包むといってもそれは持ち運び易いようにまとめるといった意味の包みであったといっていよいであろう。現今、食品を包むというのは主に、衛生上の都合や保温あるいは調理上の便利さからの包みであるから、それなりの使い方を知る必要があるといえようか。お母さんの台所のお手伝いをしながら、こうした物理解の生活経験の場を得ることができるであろう。そういえば、この頃の子供達の生活では所謂ままと遊びというのはすっかり姿を消してしまっているが、ごっこ遊びは自分が見聞きした大人の生活場面の再現であるから、お母さん役になれば台所のお母さんの仕事を色々なものを道具に見たてて使って、それなりの動作をしてみせることであろう。そうした点から考察すると幼児のごっこ遊びは子供らしい物の捉え方や発想力を育てる活動として再評価に値するものである。包む動作を主としてのごっこ遊びではプレゼントごっこやお店屋さんごっこがある。クリスマスプレゼントや誕生日プレゼントあるいは母の日、父の日プレゼント等、機会はたくさん得られるであろう。多くの場合プレゼントの中味作りが主で、そのための活動が一般的であるが一步進んで「包む」ことにも活動のねらいを持たせて、そのための活動を展開する。つまりパッケージ作りや包装紙作りをするわけである。そこでは当然のことながら包むものに合わせた包み方という包む方法が工夫されなくてはなるまい。デパートでの買い物のカウンターで店員さんが大きな包装紙を順序よく折ってみごとに包んでくれるのは、そうし

た包み方を心得ているからだ。包装紙をシワシワにせずに包めたらプレゼントも、とても素敵に見える。勿論ごっこ遊びとして、小石を落の葉で包んだり、木の実をティッシュで包んでみたりする所から包み方の工夫を見つけるのも大切なことであろう。また、お店屋さんごっこでも商品のお芋やリンゴやおもちゃ作りばかりでなく、「包む」活動にねらいを持ったパッケージ作りや包装紙作りも必要になってこよう。

「包む」ということでは、上述のように衛生上の点からあるいは持ち運びや装飾、更には礼儀上から等の捉え方が一般的であるが少し視点を変えて、隠すという捉え方もできるであろう。勿論その必要性には衛生上の問題や礼儀上の問題から包み隠すという意味があつての場合もあろうが、ともかく包まれたら中に何が入っているのかわからないという状況が生れる。幼児にとって、包まれて入っている中味は何なのか、大変興味を呼ぶであろう。それは友達どうして手の中に何かを包んでカラカラと音を出して、これなあにというあてっこのゲームに発展する。手で包むことから新聞紙で包む、風呂敷で包む、更にはシートで包む等包む物によって色々な特色ができる。風呂敷でしっかり包むと中味の形がそこに出たりする。ここでは音や形の一部から発想を展開することに活動の意味があろう。包みの捉え方を更に転じて「身体を包む」から紙の洋服作り、「頭を包む」から仮面作りやとんがり帽子作り等、楽しい製作活動に展開できる発端として捉えることもできるであろう。

27 さす（刺す・射す・差す・挿す・指す・注す）

「さす」という動作は感覚的に鋭く尖った細い物との関わりを思い浮かべる。痛々しい印象は物と物との関係でありながら、一方が他方の本体の中味にブスリと突き刺さる状態や、よりよく刺さるためにその先端は固く鋭く光って不注意な取扱いによっては、自らをも刺しかねない心配感から生じるのであろう。刺す対象の物は色々変わっても刺す物の形態は突き刺さるという機能面から、細長いという共通した形態を持っているといえよう。こうした細長い物の取扱いとして「さす」動作の身体機能は、指先で持ったり対象に対して集中したり方向性を見い出したり等の関わりがあろうか。

「さす」ことはまた、裏切り行為という後ろめたい陰湿な意味を含んでいる。痛々しい印象はこうした語義とも無縁ではなかろう。もっとも「釘をさす」という用法から考えれば磐石の守りのためには欠くことのできない意味を持っていよう。

- 釘を発泡スチロールにさす
- 小枝を砂山にさす
- 楊枝を果物にさす
- 針を布にさす
- 画鋸を板にさす
- マッチ棒を穴にさす

「さす」という動作は手先の小さな動きに関する動作で細長い物をつまむ親指と人差指の

機能に集約されるであろう。しかし「さす」という状況は細長いものを他の物の中に突き立てることであれば規模の大きな場面も考えられ、そこでは力一杯の身体機能としての関わりを求められるであろう。また規模の大小に関わらず細長いものを何に刺すかによって軽い手先の動作で済む場合と全身を使つての動作になる場合がある。釘を発泡スチロールに刺すのは、物をつまむ機能があれば刺す動作はいとも簡単にできるであろう。これは当然のことながら年少から未満児も対象児として考えてよい素材であろう。釘は長いものや短いもの等色々な種類をそろえ、発泡スチロールもできれば新しい平面のもので、釘に対して十分な厚さのあるものが必要であろう。廃品としての梱包材料の発泡スチロールも凹凸があり幼児の興味を引くであろうが、釘を刺していく上でやや発想を規定してしまう心配がある。無意識に釘をブスブスッと刺していく快感で手元の釘の箱はいつの間にやら空になってしまう。白い発泡スチロールの面に点々とつながる釘は何やら人の顔に見える。点々をつないで眼鏡をかけたお父さんの顔になった。「今度はお母さんの顔を作ろう」「動物さんもできるよ」「お家も作ろう」。こうした展開が見い出せれば「刺す」という活動のねらいは達成されたと見てよいであろう。また「刺す」という動作のねらいから色々な材料経験や表現というねらいを持てば、年長の幼児にはベニヤ板と同じ大きさの発泡スチロールを用意して共同で製作するなども考えられるであろう。刺す物としての釘は色々な大きさや種類があることから、そうしたたくさんの釘を準備することにも意味がある。例えば波板を打つのに専用の釘はおさえの頭が大きかったり色がついていたりして、刺してからの発想や展開に役買うであろう。また釘から転じて爪楊枝や竹串・画鋸も発泡スチロールにはもってこいの相手であろう。ちょっと難はあるがマッチ棒も先端の赤は、白い発泡スチロールには効果的である。また発泡スチロールを小さく切って、そのブロックに釘や爪楊枝を「刺す」ことも考えられよう。これは平面としての表現や発想から立体としての創造活動を求めるもので、たとえば始めは同形で2〜3センチ立方の発泡スチロールに爪楊枝何本刺さるかなということ働きかけたりする。上からも下からも、あるいは斜めからもとたくさん爪楊枝の刺さった発泡スチロールは不思議な物として幼児の前に出現する。「栗」や「うに」や「やまあらし」のように見えたり、「トゲトゲボール」だったり幼児なりきの感覚での受け止め方がある。これを集めてつなげて天井から下げてもよいであろうし画板で坂を作って転がしてみてもよいであろう。また発泡スチロールを適当に割ったり切ったり不定形の形にして楊枝を刺すと三本で楊枝を足にして立つ形が見つかったりする。発泡スチロールの山の中から色々な形さがしが始まる。「これはカバさんになるかな」「これはキツネさんになるかな」。楊枝を発泡スチロールに全部刺し通すと、小さな発泡スチロールのブロックをどんどんつなげることができる。（前出 25 とおす の項参照）胴体を長くしたり、首をつけたり表現の幅が広がる。こうしてみると刺す活動にとって発泡スチロールは貴重な素材である。刺す相手が余りに固いと刺す動作は成り立たない。適当な軟らかさがないとだめである。そういえばかつて、発泡スチロールのまだない時分それと同じような性質の自然物で、しかも刺す動作を伴って遊んだ覚えがある。それは山吹の伸び切った幹の芯の組織で、細身の箸をその芯に突き通すと弾

けるように真白な軟らかい芯が飛び出してくる。芯の組織は白く細い丸棒の形で、これをところてんのように突き出すことの面白さと楽しさもさることながら、この芯を1～2センチに小さく割って地梨の棘に刺すのである。地梨は草ボケで、その枝はたくさんの棘を持っている。この枝を取ってきて山吹の芯を刺すとそれこそ枯木に花を咲かすことができるのである。山吹も草ボケも葉を始末した覚えがないから、きっと秋遅くまだ雪のこない小春日和の頃がその遊びの時節であったかも知れない。つまり文字通り枯木に花を咲かす遊びとして長らく山里の子供に伝承されてきたものであったにちがいない。この場合の「刺す」は今まで考察してきた刺すと違って、突き刺さる鋭い先端は固定されていて、そこに刺さるものを持って刺していくという逆の構造になっていることである。こうした逆の構造である釘に発泡スチロールを刺すという動作の持つ意味は、釘を持って刺すという動作とかなり違ってくるであろう。まず手先・指先の機能として持ち握り細く長いものを持つことと、手頃な大きさを持つことの違いがある。また動作の跡として、捉える物が逆になるということもあろう。しかし活動の展開や発想の場は倍になったと考えることもできるであろう。

幼児を取り巻く日常生活の中でも「さす」動作は欠かすことができない。特に食事の場面では、フォークや爪楊枝・串など刺すための道具があり、この道具を使って食べるという場面では当然のことながら刺す動作が繰り返される。皿に盛った煮豆を楊枝で刺して食べるというのは発泡スチロールを刺す活動などには代え難い日常生活での願ってもない場面であろう。他に日常生活の場面では「さす」動作として状差しにハガキを差し込んだりコンセントにプラグを差したり、花入れに花を挿したりという既にすき間や穴のあいている個所に差し込む動作がある。こうした動作を抽出した遊具（ペッグという名称であった）で幼児が盛んに差す動作の繰り返し活動を楽しむのを観察したことがあるが、差すことの楽しみはやはり視覚的な創造活動が主になっていたといつてよいであろう。15cm 四方ぐらいの台に等間隔で40～50個も穴があいていて、そこに各種の色付きの peg（プラスチック）を差し込んで色模様を作ったり、形を作ったりするわけである。指先の機能を高めると同時に視覚との共応や造形的な発想力を拡げる役割を果たす、なかなか貴重な感覚遊具である。勿論こうした活動に於いてもそれを認めてやる保育者が傍らにいて、見守ってやることの中でそうした展開が進展するといえる。その役割は幼児の創造力豊かで活動的な成長の一步一步に釘を刺すことでもある。(1986.10.26)

（未完）